



増田敬太郎

明治2年(1869)年—明治28年(1895年)

明治2年(1869年)8月10日に、当時の合志郡泗水村(現在の菊池市泗水町)の裕福な増田家の長男として、増田敬太郎さんは誕生しました。幼い頃から立派な体格で、おおらかな性格の敬太郎さんは、誰からも好かれる人物で、永島塾で漢学を、後藤塾では数学や測量学を学び、数学の天才と言われていました。阿蘇郡馬見原(現在の山都町)の用水路工事や北海道開拓、泗水村での養蚕業など世のため人のためになることを次から次へと行う人物でした。

神様になった警察官

特集

増田敬太郎物語

今から113年前、当時の佐賀県東松浦郡入野村高串地区(現在の唐津市肥前町高串地区)を襲った伝染病「コレラ」と闘った一人の警察官がいました。命を救われた人々は、その偉業を親から子へ子から孫へと語り継ぎ、今でも感謝の気持ちを持ち続けています。その警察官は増田敬太郎さん。明治2年(1869年)8月、当時の熊本県泗水村(現在の菊池市泗水町)に生まれた25歳の青年でした。



増田神社参道

感染を恐れず 防疫に尽くす

高串地区の住民は、コレラという病気を恐れてはいたものの、予防の知識はなく、いつものように患者の家を行き来していました。増田巡査が高串地区に着いた時、村の真性患者は40人、疑似患者も34人で死亡者は9人を数えていました。増田巡査は、すぐに地区内の様子を調査し、区長たちと「コレラ感染を防ぐには、一刻も早く患者と健康な人との接触を断たなければならぬ」と対策を講じることにしました。早速、患者の家の周りに縄を張り巡らして消毒をし、人の行き来を禁止したり、人々に決して生水を飲まない、生のままの魚介類を食べないようにと厳しく指導して回ったりしました。

●根拠のない噂

増田巡査の努力とは裏腹に、すでに手遅れだった患者が、薬を飲んで亡くなったのをきっかけに「患者に毒薬を飲ませている」と、何の根拠もない噂が広がり、治る見込みのある患者までもが「毒薬の薬など飲まない」と言い出したこともありました。そんな状況の中でも増田巡査は、根拠強く地区の人々の誤解を解いて回りました。一方では「亡くなった人に触れると感染する」と地区の人々は遺体運搬を拒んでいました。そんな時でも増田巡査

伝染病予防の適任者

明治28年7月に、佐賀県の巡査教習所(現在の警察学校)へ入った増田敬太郎さんは、漢学や数学、その他の一般学などに相当深く学識があり、約3カ月の教習課程をわずか10日間で習得して卒業します。そして、7月17日に巡査に任命され、7月19日に唐津警察署に配属されました。明治28年(1895年)、当時の日本では伝染病のコレラ(※)が各地で流行し、この年は恐ろしいほどの広がりをみせていました。唐津警察署の担当地区、高串地区も例外ではなく、当時の担当巡査は病気がちで、応援を求めていました。早速本部では、適任者を探します。その中から、巡査教習所を10日間で卒業したという秀才ぶりに加え、伝染病予防に必要な衛生面にも知識がある増田巡査に目が留まりました。当時の警部は「佐賀県警察界にこれ以上の適任者はいない。どうかこの危機を救ってくれないだろうか」と言ったとあります。人一倍正義感の強い増田巡査はすぐに任務を引き受け、唐津から交通機関など何もない山道をたどり、7月21日にコレラが蔓延している高串地区に到着しました。増田巡査が警察官になって、4日目のことでした。

●容赦なく襲い掛かる病魔

高串地区に到着してから3日間、不眠不休で働いたためか、25歳と若い増田巡査でも疲労には勝てませんでした。増田巡査終えんの家「八千代旅館」。2階にある部屋(扉の奥)で増田巡査は亡くなりました。柱などは当時のままの姿を残しています。

その全身全霊で取り組む姿に、人々は次第に胸を打たれていました。傾斜の急な坂道を何度も登り、墓地に埋葬しました。は遺体を消毒し、むしろで巻いて背負い、傾斜の急な坂道を何度も登り、墓地に埋葬しました。その全身全霊で取り組む姿に、人々は次第に胸を打たれていました。



増田巡査終えんの家「八千代旅館」。2階にある部屋(扉の奥)で増田巡査は亡くなりました。柱などは当時のままの姿を残しています。



高串地区を一望できる岡の上にある増田神社の境内



唐津市肥前町へのアクセス □植木I.C~多久I.C.唐津市中心部を通り、車で約3時間

※コレラ

経口感染症のひとつで、コレラ菌に汚染された水や食物を口にすることで感染します。潜伏期間は通常1~3日で、発症すると激しい下痢とおう吐、脱水症状が現れます。コレラ菌は、口から体内に入っても酸に弱いため胃酸でかなりの菌が死滅しますが、睡眠不足や疲労で胃酸の働きが悪いと、感染する可能性が高くなると言われています。

その疲れきった体に病魔は容赦なく襲い掛かり、ついには7月23日の午後突然「気分が悪い」と倒れてしまいます。翌日、看病に来た村人に「高串のコレラは私が全部背負って行きますから安心してください。でも、人々には私が指導したように看病と予防を続けるよう伝えてください」と遺言し、7月24日午後3時に帰らぬ人となりました。増田巡査が警察官になって7日目、高串地区に来て4日目のことでした。村人は、その悲報に驚き悲しみました。そして翌日、高串地区の沖にある小松島で増田巡査は火葬され、唐津で警察葬が執り行われました。増田巡査の遺言どおりコレラは間もなく収まり、穏やかな日々が高串地区に再び訪れました。増田巡査が亡くなってから、地区の人々は、その献身的な行為に心から感謝し、遺骨の一部を一番見晴らしの良かった秋葉神社の境内に埋葬しました。その後、石碑や祠(ほこら)が建てられ、明治39年に秋葉神社と合祀され、今の増田神社となりました。